

IWATE 教育総研ニュース

No.6 2021.5.25

岩手県教職員組合
岩手教育総合研究所

〒020-0022

岩手県盛岡市大通一丁目1-16

岩手教育会館4F 岩手県教互センター内

TEL/019-623-4432 FAX/019-652-9535

E-mail:j.sato8252@gmail.com

リレー特集

岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～

異国で生きる体験から思ったこと



徐 侖 希 (そゆんひ)

(岩手県立大学 総合政策学部 講師)

略歴

2004年	3月	新宿日本語学校	卒業
2008年	3月	一橋大学法学部	卒業
2015年	7月	早稲田大学法学研究科	博士後期課程 単位取得満期退学
2015年	8月～2020年3月	名古屋大学法学研究科	特任助教
2020年	4月～	現職	

私は外国人です。出身は韓国の釜山（プサン）という港町。初めて日本に来たのは日韓ワールドカップがあった2002年なので、あれから20年近く日本に住んでいることとなります。年月が経つにつれて日本での生活にも随分慣れてきた気がします。しかし、日本に来たばかりの頃は、韓国との違いに不思議に思ったり、戸惑いを感じたり、時には傷つけられたりすることもありました。

その一例にカレーライスの食べ方があります。東京で日本語学校に通っていた時、学んだ日本語を学校ではないところで実際に使ってみたく、また経済的にも少し余裕を持ちたいという思いから、日本語学校の近くにある飲食店でアルバイトをしていました。そんなある日、まかない料理として出てきたのがカレーライス。そのカレーライスを私は自分の食べ方で食べていたところ、アルバイト先の店長から「なんと下品な食べ方」「日本人はそんな風に食べないよ」と言われたのです。その時の私のカレーライスの食べ方は、カレーとライスを全部混ぜてから食べる方法でした。しかし、店長曰く、日本人はカレーとライスを混ぜないとのこと。私の食べ方と違うという日本人のカレーライスの食べ方がある意味新鮮でした。そんな食べ方があったのかと。しかしながらその一方で、ちょっと悔しい気持ちもありました。下品？、私のカレーライスの食べ方は、なぜそこまで言われなければならないのかと。

この出来事があったから、人（その多くは日本人）のカレーライスの食べ方が気になって、よく観察するようになりました。そうすると、食堂で見かける日本人のカレーライスの食べ方は、私の食べ方とは確かに違っていました。私のようにカレーとライスを全部混ぜてから食べる人は、私が見た限りではいませんでした。その一方で、日本人はカレーとライスを混ぜないというアルバイト先の店長の話は、日本人のカレーライスの食べ方を部分的にしか表していないことも分かりました。アルバイト先の店長が言ったようにカレーとライスを混ぜることなく、ライスをすくって、すくったライスをカレーに付けて食べる人もいれば、私のようにカレーとライスを全部混ぜてから食べる人を見かけることはなかったものの、中にはカレーとライスを少しずつ混ぜながら食べる人もいたからです。要するに、同じ日本人であっても、カレーライスの食べ方は人によって微妙に違っていました。

ということであれば、つまり、同じ日本人であっても、カレーライスの食べ方は一様ではなく、人によってそれぞれ異なるものであれば、私のようなカレーとライスを全部混ぜてから食べるカレーライスの食べ方も十分あり得るでしょう。しかし、私は、外でカレーライスを食べる際には、それまでの自分のカレーライスの食べ方を変えることにしました。要するに、これまで見かけてきた日本人のカレーラ

イスの食べ方を、私は真似しているのです。

私はなぜここまでカレーライスを食べ方を気にしているのでしょうか。思うに、あのとき、アルバイト先の店長が、「なんと下品な食べ方、『日本人は』そんな風に食べないよ。」ではなく、「なんと下品な食べ方、『私は』そんな風に食べないよ。」と言っていたのであれば、私のカレーライスを食べ方に対する思いもまた違っていただかもしれません。というのも、アルバイト先の店長の「『日本人は』そんな風に食べないよ。」という発言に対し、私は、あたかも韓国人である私自身を「下品」と否定されたかのように感じたからです。

アルバイト先の店長から、自分のカレーライスの食べ方が日本人の食べ方と違うことについて指摘を受けたあの出来事から相当年月が経ったある日、ふと気になってカレーライスの食べ方についてネットで検索してみたことがあります。そこで、カレーライスの食べ方については、日本人の間でも意見が一致せず、議論となることがあることや、私がこれまで実際に見かけることはなかったものの、日本人の中にも、私のようにカレーとライスを全部混ぜてから食べる人が、少数派であるとはいえ、存在すること、また、これら少数派の人たちもその食べ方について周りの同じ日本人から注意されることがあることも知りました。

そうすると、「なんと下品な食べ方、日本人はそんな風に食べないよ。」と言ったアルバイト先の店長の発言は、あくまで店長と異なる食べ方をしていた私のカレーライスの食べ方に対する指摘であって、韓国人である私自身を否定するものとしてとらえることはないし、また、それまでの自分のカレーライスの食べ方を変えて、多くの日本人のカレーライスの食べ方を真似することもないでしょう。にもかかわらず依然として私は、外でカレーライスを食べる際にカレーとライスを全部混ぜてから食べることはしていません。もしかすると、日本では多数派の日本人のようにふるまう方が嫌な思いをせずに済むという、ある種の自己防衛が働いているかもしれません。あるいは、周りの日本人が私（＝韓国人）に対して持つ負のイメージ（＝下品な食べ方をする韓国人というイメージ）を書き換えようとでもしているかもしれません。

以上のカレーライスの食べ方にまつわる私の体験は、否応なしに自分が韓国人であることを認識・意

識させると同時に、世の中や人に対する自分の見方・感じ方が変わるきっかけにもなりました。

その一つが、常識というのは決して絶対的なものでも不変なものでもないということです。韓国にいた頃、私は、自分のカレーライスの食べ方について周りから指摘されることはありませんでした。このことから考えられるのは、もしかすると、カレーとライスを全部混ぜてから食べるカレーライスの食べ方が、韓国では多数派であって、カレーライスの食べ方の常識であったかもしれないということです。しかし、この常識というもの、社会が変われば非常識へと変わり得るということを、日本と韓国の多数派のカレーライスの食べ方の違いから思い知らされました。

もう一つは、日本人はこうである、韓国人はこうである、というように、日本人や韓国人をひとくくりにしてする説明の仕方が、いかに不適切であるかということです。先ほども述べたように、私が実際に観察した限りにおいても、日本人のカレーライスの食べ方は人それぞれであって、一通りではありませんでした。日本人はカレーとライスを混ぜないというアルバイト先の店長の、日本人のカレーライスの食べ方に関する認識は、あながち的外れとはいえませんが、日本人のカレーライスの食べ方の全体像を適切に説明できているとも言えません。であればなおさら、あのときアルバイト先の店長は、「日本人はそんな風に食べないよ」ではなく、「私はそんな風に食べないよ」といった方が良かったように思います。そして、このことは、私が韓国人のカレーライスの食べ方について聞かれたときにも当てはまるでしょう。少なくとも私が韓国にいる間は、自分のカレーライスの食べ方について周りの韓国人から指摘されたことはなく、そこで、韓国ではカレーとライスを全部混ぜてから食べるカレーライスの食べ方が多数派ではないかと推測はしてみるものの、本当にそうであるかどうか、韓国では人のカレーライスの食べ方を気にして観察したこともないし、実をいうとよく分かりません。そして、むしろ、同じ日本人であっても、カレーライスの食べ方は人によって違っていったように、韓国人のカレーライスの食べ方も人によって異なり多様性があるべきではないかとも思います。

それでは、皆様のカレーライスの食べ方とはいかなるものなのでしょうか。

魅力と可能性にあふれる地



大西英正

(新聞記者)

岩手に来て3年が過ぎました。直前にいた大阪と、たしかに文化が違うかもしれません。この文を書くにあたり頂戴したお題は「岩手の学校教育に期待すること」。壮大なテーマです。教育担当として専従で取材をしたわけではなく、これまで行政、選挙、震災を主に取材してきました。頂いたスペースに見合うものを書けるか心もとないですが、最近の取材を通して感じたこと、そして文化の違いのようなものにも触れながら、県外出身者としてお題に少しでも近づけたらと考えています。

2011年4～5月、私は震災の応援取材で沿岸部に来ました。それ以降、社内で異動の希望欄には「岩手」と書いてきました。とりわけ、震災直後取材した陸前高田への思い入れが強くあったからです。

震災10年となった今年の3月11日、朝日新聞の夕刊。【母校の子どもたちと前を向く】という見出しで、高田の校長先生の記事を載せました。この記事は12日の岩手版にも載っているのですが、ご覧いただいた方もいらっしゃるかもしれません。甚大な被害を受けた陸前高田市。複数の児童が犠牲になった小学校で、深い傷を残した震災をどう伝えるべきか。そう悩み、迷い続けた校長先生のお話です。

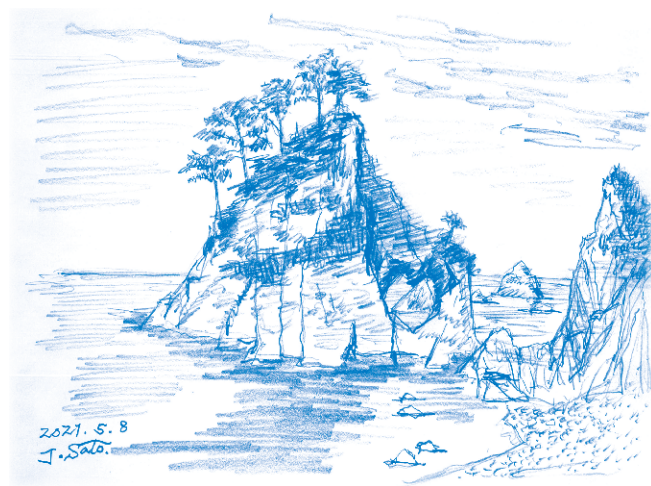
校長先生は震災のとき、内陸の学校で副校長をしていました。しばらく生まれ故郷に戻れず、3週間ほど経ってから、高田で暮らす両親を別々の遗体安置所で見つけました。校長先生自身、教師になるまでにいろんなことを経験しており、それも記事で記しました。

略歴

2006年 大阪市立大法学部卒業
同年 朝日新聞社入社、
長野総局に赴任
2009年 大津総局に赴任
2011年 大阪本社に赴任
2018年 盛岡総局に赴任

校長先生が今勤める小学校では、震災や津波を子どもたちに直接感じさせるような授業は控えてきました。心を傷つけてしまうと心配していたからです。もちろん、それは欠かせない配慮です。一方で、内陸の勤務も長かった校長先生は、震災に関する学習がどんどん進む内陸との温度差を感じていました。「命を守る行動を次の世代に伝えるのは教師の使命ではないだろうか」「いま高田で起きている復興に向けての動きを知らせなくて良いのか」。葛藤がありました。

学校内で半年ほど議論を重ね、一歩踏み出すことを決めました。震災で息子を亡くしたお母さんを招いた授業。「大切な人を思い浮かべながら聞いてね」と、語りかけるお母さん。亡くなった息子の話や避難の大切さを、じっと聞きながら涙をぬぐう子どももいました。感想文には「津波は一瞬で多くの物を無にしてしまう。怖い。普段から避難を考えることが大切」「悲しく、寂しくなった。いまが幸せだと、すごくわかりました」。そんな言葉が並びました。



今年3月11日朝にあった全校集会。校長先生は子どもたちに語りかけます。「小さな松ぼっくり、この小学校のみなさん。夢と希望と感謝の気持ちをもって大きくなってほしい。あの一本松のように」。「震災のあと、2つの『えん』のおかげで、この街があります。支援と人の縁です。大切な人を思いながら生きてください」。コロナ禍でもあり、取材は制約されて私は直接聞くことが叶いませんでした。けれど、校長先生のひと言ひと言から、前を向いて進もうとする姿がありありと浮かび上がってきました。

震災という大きな苦難を受けながら、子どもたちと一緒に校長先生ご自身も、一步一步前に進んでいるんだ。そう強く感じました。

これまで私は教育行政の取材にも取り組んできましたので、高校の話ですが二つ紹介いたします。

【教科「情報」、現場に不安感 高校で必修、内容が高度化へ…】という記事を書きました。少々古くて、2019年1月のものです。教科「情報」への対応として、県教委は他の教科を受け持つ教員に「二足のわらじ」を履く形での指導に頼ってきました。しかし2022年度から実施される新学習指導要領では「情報」が一段と重視されて内容も高度になるため、現場や専門家が不安視している、という記事です。

今年4月末、改めて記事で登場する先生に話を聞きました。新卒採用の大学生は極めて少なく、状況は変わらず厳しいとのことでした。教えること以外にも事務作業は膨大にあります。この先生は、教える現場と教員養成機関の連携がうまくいっていないのでは、と指摘していました。変わりゆく社会のなかで事務作業も増え、子どもたちと向き合う時間を捻出するのに多くの先生が苦勞されているだろうと想像します。

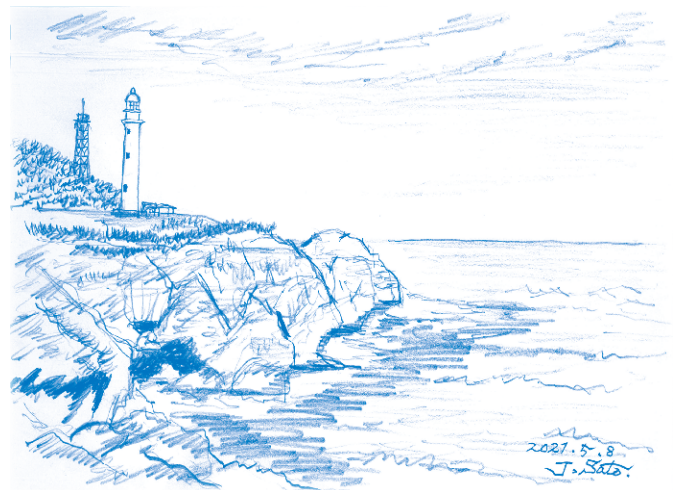
もう一つは再編問題。【県立高校再編計画、年度内決定見送り 再考求める動き配慮 県教委】という記事を、3月31日付けで書きました。学校がなくなることはアイデンティティーを失うようで、抵抗があります。私自身、大阪の田舎に育ったため卒業生としての思いは痛いほどわかります。

一方、少子化により若年層の人口の落ち込みは激しい。震災10年を機に沿岸地域で調べた小学校と中学校の児童・生徒数の10年間の落ち込みは、全体と比べても著しいものでした。次の10年でさらに進行します。より良い「学び」や施設の老朽化を考えながら、対策は急務と言えるでしょう。少子化との闘いは教育現場でも大きなテーマの一つだろうと思います。

教育に期待するのは、こうした苦勞、苦難を子どもたちとともにプラスに変えるようなことができなにかと思うのです。もちろん簡単なことではありませんが、ちょっとしたことでも子どもの将来に残るのではないかと感じます。

岩手は魅力にあふれる土地です。広い県土と海や山、川、起伏に富んだ土地、歴史、自然。バリエーション豊かなことは強みで、人を引きつける資源が豊富です。食材は最高で、私をはじめ岩手の食の虜になる通勤族は少なくありません。

コロナ禍は終息の気配が見えません（21年5月）。働き方は変わってきています。少し大きなことを言いますと、東京一極集中に変化を与える契機になるかもしれません。岩手には大きな可能性があるように見えます。子どもたちには、可能性あふれる岩手にいっそう自信を持って育ててもらえたらと思っています。



オピニオン

OPINION

日本教職員組合中央執行委員
(青年部長)

千葉 聡美



当たり前は変わる

「最近まで、新規採用者の車通勤はできなかった。」これは、全国各地の青年部と話をした時に驚かれる内容です。

岩手の当たり前が当たり前ではないことを知っていくのは全国組織の仕事の場に来て一番わくわくする時です。

「学校って、教員って縛られていることが多いと思っていたけれど、絶対じゃないんだ！」と感じられます。

思い返すと、岩手の中でも変化をたくさん感じていました。臨採として働いていた時、講師の先輩が「30代の頃から頭打ちだった給与が久しぶりに上がった！」と話されていたこと、教員採用試験で新たにできた講師経験枠で採用されたこと、新採用の10月から車通勤を許可してもらえたこと、それらの変化に組合が必ずかかわっていることを後になって知りました。

自分は「～に困っているんです。」と話したただけだけれど、変える一助になっていました。それは今、役員になってから実感しています。一人の組合員の「困っているんだよね。」をきっかけに権利獲得した例をいくつも聞きました。「当事者が言っていました。」は強い！

「3月中に来年度の担任や担当が分かる。」これも、全国の青年部から驚かれる内容です。全国では4月1日に知らされたり、内示なしでいきなり職員全員の前で発表されたり、なんて例

もあるそうです。

準備や引継ぎを3月から始められるって当たり前ではないようです。岩手でよかった。他県のなかまにとっては、「4月1日って決まりじゃないの!?交渉していききたい!」と発見するきっかけになったようです。

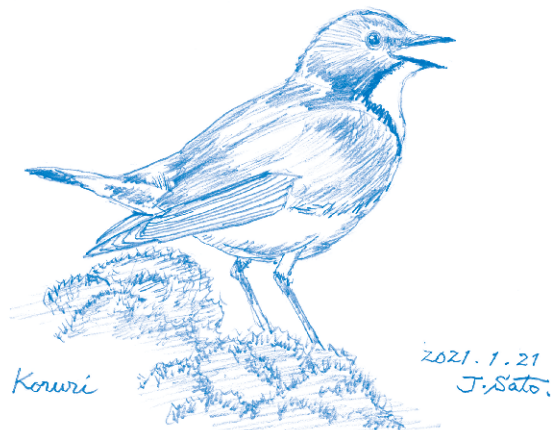
この1年で様々なことが守りから攻めになっていくのを感じています。

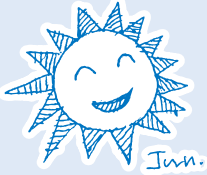
会えないからオンラインだけではなく、オンラインだから会える人がいる。

時間が制限されるから仕方なく削ったのではなく、意義を確認し内容を精査し変更できた。

何年もかかると思われていたものを変えられるかもしれない。新しいアイデアを聞くたびに元気をもらえます。

2021年、学校が私たちがどんな風に変化するを楽しんでいきたいです。





教室の窓から



Yをクラスの仲間に (その2)

文化祭が近づいたある日の「班長会」で、「Yが最近また、まわりの人を殴ったり蹴ったりするの困っています」という話が出された。

「先生、このままだとYの面倒を見切れません」とYの班の班長が困った顔で言った。

他の班長たちは、どうしたらよいかわからず黙っている。私もはっきり見通しが持っていたわけではなかったが、班長たちに聞いてみた。

「Yが乱暴なことをするのは、何か理由があるんじゃないかなあ。誰か、彼に理由を聞いてみたことはないの?」

「・・・」

「じゃあ、どんな時に乱暴な行動をとるか、思い当たることはないかなあ?」

ある班の班長が言った。「そういえば、まわりがYに注意した時とかに乱暴になることが多いかも・・・」

「そうか、Yは注意された時に何か言いたいことがあっても自分の気持ちを上手く言えず、それが乱暴な行動につながっているのかも。もしかしたら、みんなに関わってほしいと思ってもその方法がわからないのかもしれないね。」

「でも先生、このままじゃ困ります。文化祭の取り組みが始まっているのに、Yはさっぱり協力しないし遊んでばかりいるから、これなら班やクラスにもいない方がましです。」

私は、文化祭の展示や合唱などの取り組みを通して、Yとまわりの関係をつくることができなかと考えていた。そこで、ここが重要な分かれ道になると思い、次のように話した。

「確かに今の状態ではYはクラスのみんなに迷惑をかけているし、取り組みに支障がでてと思う。でも、ちょっと考えてほしいんだけど、仮にYがいない状態で文化祭の展示や合唱がうまく

いったとしても、それは本当にクラスとしてみんなが納得できる成果だと喜べるものなのかな?卒業の時に全員が『このクラスで良かった』と思えるためには、多少の苦労があっても、それを乗り越えることが必要だと思うよ。みんなは本当にYがクラスにいないほうがいいと思うのか?そんなふうに考えるのなら、Yでなく、他の誰かが迷惑をかけても、同じように考えてしまわないかな?Yは、本当はみんなと一緒に取り組みたいけど、それが素直に表せないだけなのかもしれないよ。」

少しの沈黙の後で、Yの班の班長が言った。「わかりました。何とか班の人たちと協力して、Yと一緒に取り組むように頑張ってみます。ただ、暴力に対してはどうしたらいいですか?」

私は、一つ提案をした。「では、こうしたらどうかと思うんだけど、Yに注意したいことがある時は、いきなりその行為を『やめて』と言うのではなく、『どうしてそういうことをするの?』と理由を聞いてみよう。そして、落ち着いて話ができるようなら、『それはまわりが困るからやめよう』とか、『そういう時はこうしたほうがいいよ』と『○○しようよ』という呼びかけにしてみよう。」と。

班長たちから徐々にYへの対応が学級に広がり、根気強く続けられ、少しずつYの暴力はおさまっていった。それは、Yを疎外せずに仲間として受け入れるというメッセージがYに伝わっていったということでもあった。そして彼らは、学級展示で教室の壁面いっぱいに見事な『ゲルニカ』の模写を完成させたのだった。

あとでわかったことだが、Yが落ち着かなかつたと思われる理由の1つは、文化祭に向けて班替えをしたのだが、「前の班に、どうやら彼が想いを寄せていた女子生徒がいたらしい。」とのことだった。これもある班長が教えてくれた。もちろん、次の班でまた彼女と同じ班になったYは、少し落ち着いた生活に戻ったのだった。(J)

